

のキャッチフレーズで地域共生社会の実現に向け、地域単位での取り組みを推奨するようになりました。

これまで高齢・障がい・児童の福祉課題は、それぞれの分野の福祉サービスで対応してきましたが、昨今では複合化・複雑化してきていることも、共生型サービスが導入された背景にあります。



【このゆびと一まれ 惣万理事長・西村副理事長のご講演】

富山では国より先行して1993年に共生型サービスが制度化されました。このゆびと一まれでは1995年に富山赤十字病院の看護師3名でデイケアハウスを始め、障がい児も受け入れたことから共生型のサービス提供が始まりました。現在は医療的ケア児への対応もしており、地域密着・小規模・多機能で事業実施をされています。

講演では、事業所の日常を写真で紹介され、高齢の利用者が障がいのある子どもをサポートする光景や、その逆に障がいのある子どもが高齢の利用者をサポートする光景もありました。一般的に両者はサービスの受け手と考えられますが、サービスの担い手にもなり、事業所の中で欠かすことのできない歯車の一つとして、大きな役割を担っていると感じました。

続く座談会では、大阪市障害者福祉・スポーツ協会の石田 易司 理事長がコーディネーターとなり、このゆびと一まれの惣万理事長と西村副理事長、全国手をつなぐ育成会連合会の久保会長で意見交換されました。

座談会は、「仲間とのつながり」をキーワードに展開されました。久保会長からは全日本育成会の解散から、全国連合会が結成された時の話があり、惣万理事長、西村副理事長からは共生型サービスを始めた時の話がありました。また、惣万理事長から、事業所の設立が「小規模・多機能」ということで、小規模をデメリットと感じるのではなく、子どももお年寄りも対応できるというメリットがあるということで、かつての日本の各地で見られた四世代や三世代が同居するといった大家族形態に通じるものを感じました。

最後に久保会長からは、昨今の若い世代の親御さんはインターネット上でのつながりで満足をしているが、非常時には近隣の知り合いで助けあう「近助」となるので、地域内でのつながりが重要であると述べられました。また、惣万理事長と西村副理事長からは、地元から始まり、県内、全国各地といったように、同じ想いの仲間とつながることで、活動に広がりを持たせることができるとおっしゃっていました。



【座談会／左から石田様・久保様・惣万様・西村様】

今回は富山での実践をお伺いしましたが、大都市圏では地域のつながりが希薄となっている状況があります。平時はもとより天災等の非常時には、自助が基本とはなりますが、共助や互助ということから近所のつながりも大切になります。座談会のまとめでもありましたが、近年は隣近所とのつながりを作ることの優先度が低くなりがちですが、特に障がいのある方が住んでいることを、地域の方々に知ってもらい、いざとなった際には助け合う関係が必要と感じました。

受付の際にピンバッジをお配りしました。20回記念として、啓発の一助となればと思います。

大阪市手をつなぐ育成会 本人部会「きずな会」 より～本人代表の挨拶について～

地域生活援助事業所 メープル 竹野 永利子

今回の第20回大阪市手をつなぐ育成会大会では、本人部会である「きずな会」のメンバーで、4月から新しく会長となった藤井広子さんが本人代表として挨拶をされました。

【本人代表として式典で挨拶する藤井広子さん】

